

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-2

「新宿は何年ぶりかしら。この辺りもすっかり変わってしまっていて……」

「すると、このホテルは？」

「初めてです」

「そうでしたか、それは失礼しました。ここのアフターヌーンティーはお勧めですよ？」

「いただきます」

朝倉はウエイターを呼んだ。

朝倉は三段重ねのティースタンドの一段目のプレートに盛り合わされた季節のケーキの中から真紀の好みを聞くと、太く短い指を器用に使って小皿に取り分けてよこした。

「ありがとうございます」と真紀は礼を言ってから、ミルクティーを一口飲んだ。

「横田の個展の事です」と朝倉はいきなり核心に触れた。

「電話でお話ししたように、この建物の十五階にあるギャラリーで来月から開きます」

朝倉は真紀の反応を窺っていた。

「はい。それで私に何を？」

「ほかでもないのですが……」と朝倉は言い淀むと、わざとがましく重々しい口調で「あなたの裸婦像も展示させて頂ければと思っていまして……」とポテツとした小鼻をビクつかせて打ち明かした。

「え？」と聞き直した真紀は、ソーサーにのせたティーカップをテーブルに置いた。

「横田の意向でもあります」

「……」啞然とする真紀を横目に、「私が彼と独占契約を結んでいることはご存知でしたね？」と朝倉は、用意されていた方便のように聞いた。

「電話では話せないことだからとおっしゃったのは、そのことでしたか」

真紀はあからさまに嫌味で返答した。

「デリケートな問題ですから」

「卑怯だわ。私の気持ちは、とうに分かっていたはずですよ」

真紀は怒りを鎮めるように、ビル群の先にあるスカイラインに視線を移していた。

「身も蓋もないなあ！」と朝倉は赤みのさしたたるんだ頬で抗弁して、「ここは私の顔を立ててくれませんか」と泣き言を漏らした。

「これで失礼します」

真紀は眉根を寄せると、席を立ちあがろうとした。

「待ってください」と朝倉はうろたえ気味に制してから、「実は、横田の懐具合がSOSでして」と浮き腰で切り出した。

坐り直した真紀の頬から血の気が引いていく様に、「ニッチモサッチモ行かない状況なのです」と朝倉は許しを乞うように、空咳をして取り繕った。